

# 人間性の根源からの絶叫を!

- 本部封鎖貫徹!
- 才二大早大斗争勝利!
- 草でし、民青の破壊粉碎!

早稲田大学のみなさんへお話し。我々は現在自由なわけにはない。我々は、現在真に生きてゐるのか、と。そして、我々にとって生きるとはどういう意味なのかと。我々には、今自由がありうるのさあるうな。自由とはそもそも人間に固有なものであり、人間にとって本来的なものである。その自由は今存在するのな! 人間の進歩の過程はとりもたず、自由への希求の過程であり、それ故その自由獲得に対する抑圧への斗争の歴史であった。その人間性の栄光を我々はいまこの地獄さどう引きついでいくのか。我々は人間性そのものを問われているのだ。我々が大学で学問をするとはどういうことなのか。各個人は日常の私生活の主観的な目的をもつて勉強をしている。そして大学にはそれぞれ(教育理念)がある。しかし、四年になつて就職のことが現実の前途となつて我々は急がしく、自分はいくらも四年間、まさに就職するために教育されてきたのだ、と。自分は、資本によって買われることによってしか生きていけない。一個の上等な商品なのであり、より価値のある労働力商品として資本に買ってもらつたために、これを手を日々勉強し他の学友と競争してきたのだ、と。労働力を売ることに伴つては漸次で肉体的な死を意味する。そこでは資本が王様であり、人間は奴隷に成つた。資本の王国、その日々の日常性はとりもたず人間性=自由のノウ失の過程なのだ。我々は今、好きと好まざるとにかかわらずさういう社会に生きてゐるのだ。これが生、と果して言えようか! 学館の管理運営権獲得斗争はしたかつて、学友のものと斗争にあつては別として行つたのであつて、その上つて我々一人一人が自己の生と現在の社会との良縁を真に見つり、そこに於ける人間性獲得=自由の領域の創出への斗争であるのかは存疑なり。学館はその一つの生野とされるべきなのだ。世間、民衆のあつては政治的・社会的・経済的・文化的に我々は、けさまでとよまず。彼らの目ざす変革とは、資本家の代りに労働者、人間を指導し支配する別の群衆された社会にすぎない。我々のあつては共同性こそと本来的、全面的に闘つてこつた。人間が人間として自立して、人間性は、みだりにして人間性の結合関係、新しい人間社会の展開、そこには、人間性の根源に於けるべきである。人間性の解放、人間の立脚点、人間性の源泉のあらから我々の斗争は、人間性を解放し、人間性を生かすに価するのさどうか。それと問われている。

斗争集団——早稲田新聞会